

富士山頂で祈りを捧げる 失われた仏の世界

6世紀に仏教が伝えられた後の日本における多くの宗教的慣習と同様、富士山信仰も神道と仏教の教えが融合したものでした。特に、富士山の高木限界線の上に広がるこの世のものとは思えない地帯は、死者たちが涅槃に入る準備をする場所とされたはるか西方の極楽の地、「阿弥陀浄土」と意味づけられました。

富士山の最頂部は、伝統的な仏教のシンボルである大きな蓮の花に例えられました。広大な中央の火口を囲む不揃いな火口壁は、「御八葉（八枚の花弁）」と呼ばれ、それぞれの「花弁」は異なる仏教の神に関連づけられていました。広大な火口内部は、本仏大日如来の化身とされた浅間の神、浅間大菩薩の領域であると信じられていました。

お鉢巡りをする巡礼者たちは、これらの花弁を一箇所ずつ時計回りに巡り、仏像を拝みました。

しかし、1868年以後、新明治政府は徹底した神仏分離を命じました。富士山からは仏教信仰の痕跡がすべて消されました。仏像は山を引きずり下ろされるか、破壊されました。富士山を取り巻く山々の名前までが変えられました。薬師如来にちなんで名付けられた薬師岳（やくしだけ）は、薬師岳（くすしだけ）になり、慈悲の菩薩である観音菩薩にちなんで名付けられた観音岳は伊豆岳になりました。かつて富士山頂に広がっていた仏の世界は、今では記憶の中にしか存在しません。